

ヨハネの福音書 (41)

「新しい戒め」

ヨハ 13 : 31~38

1. 文脈の確認

- (1) 前書き (1 : 1~18)
- (2) イエスの公生涯 (1 : 19~12 : 50)
- (3) イエスの私的奉仕 (13 : 1~17 : 26)
 - ①最後の晩餐 (13 : 1~30)
 - ②階上の間の説教 (13 : 31~16 : 33)
 - * 新しい戒め (13 : 31~35)
 - * ペテロの質問とイエスの回答 (13 : 36~38)

2. 注目すべき点

- (1) 階上の間の説教の導入部分として重要である。
- (2) 神の栄光がクライマックスに達する瞬間を迎える。
- (3) 新しい戒めが与えられる。
- (4) ペテロの失敗が預言される。

3. アウトライン

- 1. 新しい戒め (31~35 節)
- 2. ペテロの質問とイエスの回答 (36~38 節)

4. 結論：今日の信者への適用

イエスが弟子たちに与えた新しい戒めについて学ぶ。

I. 新しい戒め (31~35 節)

1. 31~32 節

Joh 13:31 ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今、人の子は栄光を受け、神も人の子によって栄光をお受けになりました。

Joh 13:32 神が、人の子によって栄光をお受けになったのなら、神も、ご自分で人の子に栄光を与えてくださいます。しかも、すぐに与えてくださいます。

- (1) ユダが出て行ったので、急速に十字架への道が開かれた。
 - ①ユダが裏切りに向ったその瞬間、イエスの栄化のプロセスが正式に始まった。
 - ②この 2 節に、栄光を受けるという動詞が 5 回も出て来る (日本語訳は 4 回)。

③栄光とは、イエスが通過する一連の出来事を指している。

* 十字架の死・復活・昇天・父の右の座への着座

④裏切りという悲劇的な出来事の中に、救済史の転換点がある。

* 神の主権

(2) 父と子の一体性が啓示される。

①イエスの死によって父なる神も栄光をお受けになる。

②十字架によって、父なる神の愛が啓示されるからである。

③父なる神が御子に与える栄光とは、復活のことである。

(3) 「すぐに与えてくださいます」

①十字架の死は目前に迫っているという意味である。

②父なる神は、メシア的王国の成就を待たずして、御子を栄光の座に着かせる。

2. 33 節

Joh 13:33 子どもたちよ、わたしはもう少しの間あなたがたとともにいます。あなたがたはわたしを捜すことになります。ユダヤ人たちに言ったように、今あなたがたにも言います。わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません。

(1) この節は、公生涯の終焉と教会時代の幕開けの間に入る転換的な節目である。

①「子どもたちよ」(テクニァ)とは、「小さな子どもたち」の意。

②ヨハネの福音書では、イエスがこのことばを使うのはここだけである。

③弟子たちに対するイエスの愛と心配りが表現されている。

④ユダが去ってからこのことばを使っている。

(2) 地上の交わりの終了

①イエスは、この世を去ろうとしている。

②訳文の比較

「わたしはもう少しの間あなたがたとともにいます」(新改訳 2017)

「ああ、もう時間がありません。あなたがたを残して行かなければならないのです……」(リビングバイブル)

(3) 「わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません」

①これは、死、復活、昇天の預言である。

②弟子たちを拒絶したのではなく、まだその時が来ていないという意味である。

③後に、弟子たちも主のもとに行くことになる(ヨハ 14 : 2~3)。

3. 34~35 節

Joh 13:34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

Joh 13:35 互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」

(1) モーセの律法とイエスの教えの対比

- ①モーセの律法では、「自分自身を愛するように隣人を愛せ」であった。
- ②ここでは、「わたしがあなたがたを愛したように」という新しい要素が加わる。
- ③ここには、モーセの律法からキリストの律法への移行が見られる。
- ④この命令は、ユダヤ教の枠組みを超えた新しい共同体を形成する愛の原理。

(2) 新しい戒めとは、質的新しさである。

- ①イエスが示した自己犠牲の愛が、隣人愛の手本となる。
- ②誰が一番偉いかという議論とは、180 度異なる教えである。
- ③キリストの律法の中心は、兄弟姉妹に対する「愛」である。
- ④教会の力は、奇跡や知識ではなく、愛の実践に現れる。
- ⑤この愛は、聖霊によって可能となる（ロマ 5 : 5）。

II. ペテロの質問とイエスの回答 (36~38 節)

1. 36~37 節

Joh 13:36 シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ、どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行くところに、あなたは今ついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」

Joh 13:37 ペテロはイエスに言った。「主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら、いのちも捨てます。」

(1) 文脈として、神の時と人間の時の違いというテーマがある。

- ①イエスは、十字架→復活→昇天という一連のプロセスについて語っている。

(2) ペテロに忠誠心はあるが、理解が浅い。

- ①ユダヤ的メシア像としもべとしてのメシア像の違いが理解できていない。
- ②キリストに従うとは、十字架の死を通ることだということを受け入れていない。

(3) 「しかし後にはついて来ます」

- ①これは、殉教を通してキリストに従うことになるとの預言である。

②これは、ペテロ個人だけでなく、すべての信者に対する終末的希望の象徴。

(4)「あなたのためなら、いのちも捨てます」

①誠実な意志には限界がある。

②霊的成熟の必要性がある。

③これは、弟子訓練のモデルケースである。

④失敗と回復 (ヨハ 21 章) を通して、イエスは教会のリーダーを整えていた。

2. 38 節

Joh 13:38 イエスは答えられた。「わたしのためにいのちも捨てるのですか。まことに、まことに、あなたに言います。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

(1) 神の全知と弟子の未熟さの対比

①旧約聖書のイスラエルの歴史でも同じようなことが起こった。

②熱意はあっても、行動に移せない。

③ペテロは、「いのちも捨てる」と言った。

④イエスはそれを否定せずに、ペテロの弱さを指摘する。

(2)「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います」

①ここには、裁きの口調はない。

②イエスの神性とその働きに焦点が合っている。

③イエスの忍耐とペテロの回復という前提が、ここに含まれている。

④この預言は、「責め」ではなく「準備」である。

結論：今日の信者への適用

1. 神の栄光を映す人生を生きよう

(1) イエスは、父のご計画を完全に成し遂げるにより、栄光を現されました。

(2) 十字架、復活、昇天、父の右への着座は、一連の出来事である。

(3) 成功や繁栄ではなく、従順と献身を通して神の栄光が現れる。

(4) クリスマンには神の栄光を反映させる責務がある。

2. 愛こそが伝道の最大の武器

(1) イエスは、十字架の愛で私たちを愛された。

(2) 信者同士がその愛を実践するとき、それが最大の証しになる。

(3) 教会の中での愛の関係は、外の世界への伝道の土台である。

(4)「愛されたい」から「愛したい」へ意識を切り替える。

3. 失敗の中でこそ、恵みは輝く

- (1) ペテロは誠実であったが、自分の弱さを知らず、主の警告を受けた。
- (2) イエスはそれでもペテロを見捨てず、後に回復された (ヨハ 21 章)。
- (3) 自分の信仰の限界を認めることは敗北ではなく、神の恵みに生きる出発点である
- (4) ルカ 22 : 32

Luk 22:32 しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。
ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

ヨハネの福音書 (42)

「父なる神への唯一の道」

ヨハ 14 : 1~14

1. 文脈の確認

- (1) 前書き (1 : 1~18)
- (2) イエスの公生涯 (1 : 19~12 : 50)
- (3) イエスの私的奉仕 (13 : 1~17 : 26)
 - ①最後の晩餐 (13 : 1~30)
 - ②階上の間の説教 (13 : 31~16 : 33)
 - * 新しい戒め (13 : 31~35)
 - * ペテロの質問とイエスの回答 (13 : 36~38)
 - * 父なる神への唯一の道 (ヨハ 14 : 1~14)

2. 注目すべき点

- (1) 不安に襲われた弟子たちに対して、慰めが語られる。
- (2) イエスとの別離の後に与えられる祝福が約束される。

3. アウトライン

- (1) 天の住まいの約束 (1~4 節)
- (2) トマスの質問に対する回答 (5~7 節)
- (3) ピリポの質問に対する回答 (8~11 節)
- (4) 大きなわざの約束 (12~14 節)

4. 今日の信者への適用

父なる神への唯一の道について学ぶ

I. 天の住まいの約束 (1~4 節)

1. 1 節

Joh 14:1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

- (1) 心が騒ぐ 6 つの理由 (共観福音書の情報も含む)
 - ①イエスは、彼らから去って行くと言われた。
 - ②イエスは、自分は死のうとしていると言われた。
 - ③イエスは、弟子の中の一人が自分を裏切ろうとしていると言われた。
 - ④イエスは、ペテロがイエスを 3 度拒むと言われた。

- ⑤イエスは、サタンが弟子たちを試みることを許されたと言われた。
- ⑥イエスは、弟子たち全員が自分を捨てて逃げると言われた。

(2) 「あなたがたは心を騒がせてはなりません」

- ①ユダヤ人の弟子たちは、信仰の危機に直面していた。
- ②信者は、意志を働かせて、自分の心の状態を管理する責任がある。

(3) 「神を信じ、またわたしを信じなさい」

- ①イエスは、父なる神と自分を同列に置いている。
- ②ここには、信仰の次元における昇格が見られる。
- ③昇格した信仰は、次の啓示 (14 章全体) への入り口となる。

2. 2~3 節

Joh 14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。

Joh 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

(1) 「父の家」とは、「天における神の住まい」である。そこに個別の空間がある。

- ①「地上のメシア的王国」ではない。
- ②「教会時代の信者に備えられた天的住まい」である。
- ③この約束は、教会に対するものである。
- ④この約束は、携挙後の天での生活 (神の臨在の中で住む) に関するものである。
- ⑤この約束は、単なる気休めではない。

(2) イエスは、場所を備えるために去って行く。

- ①イエスは、教会が携挙されることを前提に、天的祝福の備えをされる。
- ②古代ユダヤの婚礼習慣
 - * 婚約後、花婿は父の家に戻り、花嫁のために部屋 (住まい) を用意する。
 - * 準備が整うと、再び戻って花嫁を迎えに来て、自分のところに連れて行く。

(3) イエスは、準備ができたら、また戻って来る。

- ①これは、再臨の約束ではなく、携挙の約束である。
 - * 教会時代における携挙の初期啓示である。
- ②救いに予定された人たちがすべて教会に加えられた時に、携挙が起こる。
- ③携挙の目的は、信者をイエスとともにおらせるためである。

④使徒たちだけでなく、教会時代の聖徒たち全員に与えられた約束である。

*1 テサ 4 : 13~18

*キリストにあって死んだ者は復活する。

*生きている聖徒たちは、栄光の体に変えられて天に上げられる。

3. 4 節

Joh 14:4 わたしがどこに行くのか、その道をあなたがたは知っています。」

(1) この発言は、弟子たちの理解を引き出す教育的手法である。

①既に十分に啓示してきた内容に基づき、霊的な目をもって歩むよう促している。

②「わたしが行くところ」とは、天（父のもと、昇天後の居場所）である。

③「その道」とは、イエス自身である。

④イエスは、苦難を通して父なる神のもとに行こうとしている。

⑤弟子たちは、イエスを通してそこに行くことができる。

(2) 律法の時代から恵みの時代（教会時代）への移行が起ころうとしている。

①彼らは、新しい計画（十字架→復活→昇天→携挙）をまだ把握できていない。

②トマスの質問によって、弟子たちの無知が明らかになる。

II. トマスの質問に対する回答 (5~7 節)

1. 5 節

Joh 14:5 トマスはイエスに言った。「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうしたら、その道を知ることができるでしょうか。」

(1) 生徒はラビに質問をして、ラビのことばの意味を確認した。

①トマスは、イエスがどこかに行こうとしていると誤解したのかもしれない。

②トマスのことばは、弟子たちの当惑を代弁したものである。

③彼は、現実的・論理的な思考を重視する人物である。

④この当惑は、十字架の死、復活、聖霊降臨の時まで続く。

⑤「ユダヤ的メシア観 vs. イエスの教えのずれ」が存在する。

⑥「メシア的王国はすぐに実現する vs. 天に帰り、後に迎えに来る」

(2) 福音書における教授法の典型的なパターン

①誤解→問い→啓示

②トマスの問いは、「中心的な真理」を啓示するために意図的に許されたもの。

③ヨハ 14 : 6 を引き出すために、トマスが用いられている。

2. 6 節

Joh 14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」

(1) キリストの唯一性と排他性を最も明確に語る新約聖書の中心的啓示の一つ

- ①ユダヤ人の伝統的信仰：律法や神殿を通して神に近づく。
- ②イエスの宣言：今やイエスご自身が道であり、仲介者である。

(2) 「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」

- ①イエスの 7 つの神性宣言の第 6 番目
- ②道：律法を守ることによってではなく、イエスを通してのみ人は神に近づける。
- ③真理：イエスは、神の本質の最終的表現である。
- ④いのち：イエスは、神のいのちそのものを与える源である。

(3) 「わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」

- ①救いの道は、唯一である。
- ②救いは、イエスというお方の中にある。
- ③他の道はすべて排除される。
 - * 律法主義、儀式主義、宗教的多元主義
- ④人は、恵みにより、信仰によって救われる。
- ⑤律法、祭儀、神殿などが神へのアクセス手段とされていたが、それらすべてが今やイエスに集約される。

3. 7 節

Joh 14:7 あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになります。今から父を知るのです。いや、すでにあなたがたは父を見たのです。」

(1) イエスを知ること、父を知ることである。

- ①これは、ユダヤ的な神観（神は見えない存在）に対する啓示的転換である。
- ②イエスの本質を理解したなら、父を見たことになる。
- ③「今は」よりも、「今から」が正確な訳である。

* 新しい段階への移行を示している。

(2) 弟子たちは、イエスとの交わりを通して、真の神認識に至りつつある。

- ①イエスに現れた神の本質の知覚が始まった。

III. ピリポの質問に対する回答 (8~11 節)

1. 8 節

Joh 14:8 ピリポはイエスに言った。「主よ、私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」

(1) ピリポは、超自然的な父の顕現を期待した。

- ①あるいは、シャカイナグローリーの現れを期待した。
- ②彼は、視覚的な確証が信仰に不可欠と考えている状態にある。
- ③彼は、旧約的啓示モデル（神は光・雲・火などで顕現する）を期待している。
- ④彼は、「イエスにおいて父を見た」とする霊的現実をまだ十分に理解していない。
- ⑤神を見たいというのは、人類の普遍的欲求である。

* この欲求が間違った方向に進むと、偶像礼拝につながる。

(2) 旧約の神観と新約の啓示観の対比

- ①見たら信じる vs.信じることによって見るようになる

2. 9 節

Joh 14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」

(1) これは、愛ある叱責である。

- ①イエスは弟子たちと 3 年半をともに過ごし、御父の性質と御心を示してきた。
- ②それでもなお、「父を見せてください」と願うのは、キリストのうちにある神の本質を見過ごしているからである。
- ③イエスを見た者は、父を見たのである。

* 「見る」(ὁρᾶω) は、「霊的洞察を伴った知覚」を意味する。

- ④神は人間に見ることを禁じたが（出 33 : 20）、イエスにおいて自らを人間に見せることを選ばれた。

3. 10~11 節

Joh 14:10 わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられることを、信じていないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざを行っておられるのです。

Joh 14:11 わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられると、わたしが言うのを信じなさい。信じられないのなら、わざのゆえに信じなさい。

(1) 相互内在というキリスト論的真理の啓示

- ①御父と御子は、互いに完全に一致し、かつ区別されている。

(2) イエスと父の神秘的つながりを示す証拠

- ①イエスの人格（イエスは父におり、父はイエスにいる）
- ②イエスのことば（イエスが語ることばは、父のことばである）
- ③イエスのわざ（イエスが行うわざは、父が行っているわざである）

(3) 二重の呼びかけ

- ①ことばによる信仰（直接的な啓示）
- ②わざによる信仰（目に見える証拠）
- ③この呼びかけは、ユダヤ的証拠主義に配慮した段階的信仰への招きである。
- ④最終的には、「ことばによる啓示を信じる信仰」が求められる（ヨハ 20 : 29）。

IV. 大きなわざの約束（12~14 節）

1. 12 節

Joh 14:12 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしを信じる者は、わたしが行うわざを行い、さらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです。

(1) 使徒たちは大きなわざを行うようになる。

- ①質的な意味での大きさではない。
 - * イエスが行ったよりも奇跡の度合いが高いということではない。
 - * この聖句は、現代のカリスマ運動への警告を含んでいる。
- ②量的な意味での大きさである。
 - * イエスの奉仕は、ユダヤ人の一部に向けられたものであった。
 - * ペテロのメッセージで、3,000 人が救われた。
 - * 教会の誕生や世界宣教が予告されている。
- ③これが可能になるのは、イエスが昇天し聖霊を遣わすからである。

2. 13~14 節

Joh 14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。

Joh 14:14 あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしがそれをしてあげます。

(1) 祈りの方法が新しい形に変化する。

- ①旧約時代には、祈りは仲介者なしに、直接神に向けられた。
- ②教会時代には、イエスを通して父なる神に祈る。
- ③イエスは、私たちの大祭司である。

(2) 「何でもそれをしてあげます」

- ①繁栄の神学や信仰告白主義 (Word of Faith) の解釈は、間違っている。
- ②弟子たちの使徒的使命を保証するための特別な約束である。
- ③今日の信者への適用が含まれる。

(3) 「わたしの名によって」とは、呪文のようなものではない。

- ①キリストの代理人として祈り、行動することである。
- ②つまり、神の御心い沿った祈りのことである。
- ③祈りの目標は、子なる神を通して、父なる神が栄光を受けることである。
- ④そのような祈りは、聞かれる。
- ⑤キリストの名によって祈るためには、聖書研究が必要である。

今日の信者への適用

1. 心の平安—ぶれない信仰

- (1) 「心を騒がせてはなりません」は、命令形である。
- (2) 神とキリストへの信頼が、心の平安の源である。

2. 天の住まいの約束—ぶれない希望

- (1) 天の住まいは、携挙後に与えられる住まいである。
- (2) この住まいは、イエスご自身が備えてくださるものである。

3. 道・真理・いのち—ぶれない確信

- (1) イエスの宣言は、排他的真理の再確認を迫る。
- (2) イエスの宣言は、現代における宗教的多元主義に対する明確な反証である。

4. 父と御子の一体性—ぶれない神観

- (1) 私たちは、イエスを通して神を知る。
- (2) 信仰の中心は、「神はキリストにおいてご自身を示された」という事実である。

5. 祈りの力—ぶれない使命

- (1) 「主の御名による祈り」は、力強い。
- (2) 聖霊の助けにより、自らの働きが神の栄光に直結することを期待すべきである。

ヨハネの福音書 (43)

「助け主の約束」

ヨハ 14 : 15～31

1. 文脈の確認

- (1) 前書き (1 : 1～18)
- (2) イエスの公生涯 (1 : 19～12 : 50)
- (3) イエスの私的奉仕 (13 : 1～17 : 26)
 - ①最後の晩餐 (13 : 1～30)
 - ②階上の間の説教 (13 : 31～16 : 33)
 - *新しい戒め (13 : 31～35)
 - *ペテロの質問とイエスの回答 (13 : 36～38)
 - *父なる神への唯一の道 (14 : 1～14)
 - *助け主の約束 (14 : 15～31)

2. 注目すべき点

- (1) 不安に襲われた弟子たちに対して、慰めが語られる。
- (2) 愛と従順の関係性が語られる。
- (3) 聖霊なる助け主の到来が約束される。

3. アウトライン

- (1) もう一人の助け主の約束 (15～17 節)
- (2) 戻って来るという約束 (18～21 節)
- (3) ユダの質問に対する回答 (22～26 節)
- (4) 平安の約束 (27～31 節)

4. 今日の信者への適用

助け主の約束について学ぶ

I. もう一人の助け主の約束 (15～17 節)

1. 15 節

Joh 14:15 もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。

- (1) 間もなくイエスは弟子たちの前から姿を消そうとしている。
 - ①目に見えない人を、どのように愛したらよいのか。
 - ②イエスの戒めを守ることが、イエスに対する愛を示すことである。

- ③クリスチャンは、イエスを愛している（前提としての事実）。
- ④イエスは、父なる神への従順によって手本を示された。
- ⑤クリスチャンは、イエスに対する従順によって愛を示す。

(3)「わたしの戒め」

- ①福音書の中のイエスの教え
- ②それ以降の新約聖書の教え全体（キリストの律法）
- ③では、いかにして「キリストの律法」を全うすることができるのか。

2. 16 節

Joh 14:16 そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。

- (1) 父なる神は、イエスの願いを聞かれる。
 - ①「お願いする」は「祈る」という意味である。
 - *通常は、「アイテオウ」という動詞である。
 - *下位の者が上位の者に対して願う際の動詞である。
 - ②ここでは、「エロウタオウ」という動詞が使われている。
 - *同じ位の者が他者に願うという意味である。
 - ③イエスの祭司的執りなしを予告している（ヨハ 17 章、ロマ 8 : 34）。
- (2) 弟子たちに、助け主が与えられる。
 - ①「パラクレートス」とは、助けるために「そばに呼ばれる者」のことである。
 - *英語で「comforter」、人格的存在である。
 - ②イエス自身が「助け主」であるが、それとは別の「助け主」が与えられる。
 - *「アロス」は「同質」、「ヘテロス」は「異質」という意味。
 - ③助け主は、いつまでも信者とともにおられる。
 - *旧約時代と対照的な「聖霊の内住の永続性」が約束される。

3. 17 節

Joh 14:17 この方は真理の御霊です。世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちにおられるようになるのです。

- (1)「もう一人の助け主」は「真理の御霊」である。
 - ①真理を明らかにし、それに導く霊である。
 - ②真理であるキリストを証しし、キリストに栄光を帰す。

(2) 世（不信者）は聖霊を受け入れることができない。

- ① 見ることができない。霊的洞察力の欠如
- ② 知ることもない。人格的な交わりの欠如
- ③ 罪責感を覚えても、それが聖霊によるものだとすることを理解できない。

(3) 「あなたがた」と「世」が対比されている。

- ① 彼らは、イエスの働きを通して、また派遣の中で聖霊を体験してきた。
- ② 「あなたがたは、この方を知っています」。「あなたがた」に強調点がある。
- ③ 「あなたがたとともにおられ」は、現在形（普遍的真理）である。
- ④ 「あなたがたのうちにおられるようになるのです」は、未来形である。

* ペンテコステ以降、これが現実のものとなる。

II. 戻って来るという約束 (18～21 節)

1. 18～19 節

Joh 14:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。あなたがたのところに戻って来ます。

Joh 14:19 あと少しで、世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生き、あなたがたも生きることになるからです。

(1) 悲劇が彼らを襲う前の励ましのことばである。

- ① 「孤児にはしません」は、霊的に見捨てられた状態にはしないという意味。
- ② 聖霊の到来によって、イエスの臨在が継続されるという約束である。

(2) イエスは弟子たちのところに戻って来る（三重の意味を含む）。

① 復活

* 弟子たちは、復活のイエスを見るようになる。

② ペンテコステの日の聖霊降臨

* これ以降、内住の聖霊によってイエスを見るようになる。

③ 再臨

* 再臨によって地上に戻られる。

(3) 信者と不信者の分離が起こる（霊的区別）。

- ① 不信者は、イエスを見なくなる。
- ② 信者は、イエスを見る。

(4)「わたしが生き、あなたがたも生きることになるからです」

- ①いのちの共有が約束される。
- ②イエスの復活のいのちが信者に与えられる（永遠のいのち）。

2. 20 節

Joh 14:20 その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。

(1)「その日」とは、聖霊降臨の日であろう。

- ①聖霊が信者の内に住むことによって、新しい認識と関係が始まる日である。

(2) キリストと信者の関係は神秘的である（三層の内在的関係）。

- ①キリストと父の間には存在的一致がある。
- ②信者は、キリストの内にいる。
- ③キリストは、信者の内にいる。

3. 21 節

Joh 14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」

(1) 愛と従順の結びつきが強調される。

- ①「戒めを保ち」とは、みことばを内面化していることである。
- ②「それを守る」とは、継続的に守り行うことである（現在分詞）。
- ③イエスへの愛は、従順という具体的な形で表現される。

(2)「わたしを愛している人はわたしの父に愛され、」

- ①救いの愛（無条件の愛）とは異なる、交わり（親密さ）における愛である。
- ②従順と愛によって交わりは深まる。

(3)「わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します」

- ①イエスに従順になればなるほど、イエスとの関係が深くなる。
- ②祈り、みことばの瞑想、霊的従順の中で体験する恵みである。

Ⅲ. ユダの質問 (22～26 節)

1. 22 節

Joh 14:22 イスカリオテでないほうのユダがイエスに言った。「主よ。私たちにはご自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、どうしてですか。」

(1) イスカリオテでないユダは、タダイ (マタ 10 : 3、マコ 3 : 18)。

- ①多くのユダヤ人が、ローマを打ち倒し、王座に着くメシアを期待していた。
- ②ユダは、王である方が世に姿を現さないのはおかしいと、考えたのである。
- ③なぜ神はもっと明確にご自身を現わさないのかという問いへの回答がある。

2. 23~24 節

Joh 14:23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。

Joh 14:24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた父のものです。

(1) イエスのご自身を現す相手は、イエスを愛する人だけである。

- ①イエスのことばを守ることが、イエスを愛することである。
- ②父とイエスは、その人とともに住むようになる。
- ③聖霊を通した神ご自身の内住である。
- ④これは、三位一体の臨在の約束である。

(2) 不信者は、イエスを愛さない。

- ①イエスのことばを守らない。
- ②それゆえ、父もイエスも見ることができない。

(3) イエスのことばは、御父からの啓示そのものである。

- ①イエスのことばへの応答は、そのまま父なる神への応答でもある。

3. 25~26 節

Joh 14:25 これらのことを、わたしはあなたがたと一緒にいる間に話しました。

Joh 14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

(1) 公生涯において、イエスは弟子たちに教えを与えた (回想的コメント)。

- ①これ以上のことは、弟子たちには理解できない。

(2) 十分な理解が可能になるための 3 つの条件

- ①イエスの十字架上的死
- ②イエスの復活

③聖霊降臨

- * 聖霊は使徒たちに、神の真理を新たに教える。
- * 聖霊は使徒たちに、イエスのことばを思い起こさせる。
- * この約束は、新約聖書の靈感の保証である。

IV. 平安の約束 (27~31 節)

1. 27 節

Joh 14:27 わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。

- (1) 新約時代の別れのことばは、「シャローム」である。
 - ①イエスは、弟子たちに「シャローム」を残している。
 - ②平安は、イエスが弟子たちに残す遺産である。
 - ③この世が与える平安とは異なる。パックスロマーナ。
 - ④「わたしの平安」とは、神の御心に絶対的に委ねきった魂の安定と喜びである。
- (2) 弟子たちは、不安と恐れに満ちていた。
 - ①キリストの平安は、現実の困難に打ち勝つ力である。
 - ②新約時代の信者が持ちうる最大の霊的特権の一つである。

2. 28 節

Joh 14:28 『わたしは去って行くが、あなたがたのところに戻って来る』とわたしが言ったのを、あなたがたは聞きました。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くことを、あなたがたは喜ばずです。父はわたしよりも偉大な方だからです。

- (1) 弟子たちの霊的状态は、まだ幼稚であった。
 - ①成熟していたなら、イエスが去って父のもとに行くことを喜んだはずである。
 - ②メシアは、辱めの段階から栄化の段階へ移行するからである。
- (2) 「父はわたしよりも偉大な方だからです」
 - ①エホバの証人は、この聖句を根拠にイエスを被造物と理解する。
 - ②父→子→聖霊という秩序がある（経綸的關係）。
 - ③イエスは受肉により、へりくだった状態にある。

3. 29~31 節

Joh 14:29 今わたしは、それが起こる前にあなたがたに話しました。それが起こったとき、あ

あなたがたが信じるためです。

Joh 14:30 わたしはもう、あなたがたに多くを話しません。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることができません。

Joh 14:31 それは、わたしが父を愛していて、父が命じられたとおりに行っていることを、世が知るためです。立ちなさい。さあ、ここから行くのです。

(1) いまだに自己中心的な弟子たちに、あらかじめ情報が与えられた。

①実際にそうなったときに、彼らがイエスを信じるためである。

(2) これ以上話す時間がない。

①この世を支配する者（サタン）がイエスに近づいている。

②しかし、サタンはイエスに対してなんの権威を振うこともできない。

③イエスが十字架にかかるのは、父なる神への従順（愛）のゆえである。

④「立ちなさい。さあ、ここから行くのです」

⑤階上の間での説教は終わった。行動を起こす時がきた。

今日の信者への適用

1. 愛と従順は、切り離せない。

(1) クリスマンは、主イエスを愛している。

(2) 主イエスへの愛は、従順な生活で表現される。

(3) 「どう読むか」と「どう従うか」は、車の両輪である。

2. 従順な生活は、聖霊によって可能となる。

(1) 聖霊は、教え、導き、慰め、思い起こさせる方である。

(2) 聖霊は、信者の心に内住しておられる。

(3) 「聖霊の導きに委ねる」習慣を養う必要がある。

3. 神は、愛し従う者の中に住まわれる。

(1) 父と子が、その人とともに住む。

(2) 神との交わりは、日々の従順と愛によって深まる。

(3) 私たちの心の中は、神がともに住むための住まいである。

4. 信じる者には、キリストの平安が与えられる。

(1) この平安は、神との一致からくる平安である。

(2) この平安を受け取る信仰の選択が必要である。

(3) キリストを愛する者には、状況に左右されない平安が与えられる。

ヨハネの福音書 (44)
「ぶどうの木にとどまる人生」
ヨハ 15 : 1～10

1. 文脈の確認

- (1) 前書き (1 : 1～18)
- (2) イエスの公生涯 (1 : 19～12 : 50)
- (3) イエスの私的奉仕 (13 : 1～17 : 26)
 - ①最後の晩餐 (13 : 1～30)
 - ②階上の間の説教 (13 : 31～16 : 33)
 - * 新しい戒め (13 : 31～35)
 - * ペテロの質問とイエスの回答 (13 : 36～38)
 - * 父なる神への唯一の道 (14 : 1～14)
 - * 助け主の約束 (14 : 15～31)
 - * ぶどうの木にとどまる人生 (15 : 1～10)

2. 注目すべき点

- (1) ヨハ 14 章は、階上の間で語られた。
- (2) ヨハ 15 と 16 章は、ゲツセマネの園に向かう途中で語られた。
- (3) 途中に、ぶどう畑があったと思われる。
- (4) 数時間後には、逮捕されることになっている。

3. アウトライン

- (1) イエスと父なる神の関係 (1～2 節)
- (2) 弟子とイエスの関係 (3～6 節)
- (3) 従順と祝福の関係 (7～8 節)
- (4) 愛と戒めの関係 (9～10 節)

4. 結論：今日の信者への適用

ぶどうの木にとどまる人生について学ぶ

I. イエスと父なる神の関係 (1～2 節)

1. 1 節

Joh 15:1 わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫です。

- (1) ヨハネの福音書に出てくる 7 番目の神性宣言である。

①「I am ○○」である。

(2) 旧約聖書では、イスラエルの民がぶどうの木にたとえられた。

①詩 80 : 8

Psa 80:8 あなたは エジプトから／ぶどうの木を引き抜き／異邦の民を追い出して／それを植えられました。

②エレ 2 : 21

Jer 2:21 わたしは、あなたをみな、／純種の良いぶどうとして植えたのに、／どうしてあなたは、わたしにとって、／質の悪い雑種のぶどうに変わってしまったのか。

③イザ 5 : 1~7、エゼ 15 : 1~8、ホセ 10 : 1 など参照

④「ぶどう畑」にたとえられることもある。

(3) イスラエルとイエスの対比を見落としてはならない。

①神は、イスラエルを純良種の良いぶどうとして植えた。

②手入れをして育て、豊かな収穫を期待した。

③しかし、イスラエルは質の悪い雑種のぶどうに変わった。

*酸いぶどうか、腐ったぶどうしか実らなくなった。

④イエスは、イスラエルの代表として神の計画を成就される。

*それゆえ、イエスは「まことのぶどうの木」である。

(4)「わたしの父は農夫です」

①神は、摂理的主権を持っておられる。

②神は、信者が実を結ぶために、手入れをされる。

2. 2 節

Joh 15:2 わたしの枝で実を結ばないものはすべて、父がそれを取り除き、実を結ぶものはすべて、もっと多く実を結ぶように、刈り込みをなさいます。

(1)「それを取り除き」ということばの 3 つの解釈

①偽の信者は取り除かれるという意味

* イスカリオテのユダがその例である。

②罪を犯したために救いが取り去られるという意味

* これは、永遠の救いを保証する他の聖書の箇所から判断してあり得ない。

③信仰が後退しているので取り除かれるという意味

* もしそうなら、これは肉体的死を意味する (1 コリ 11 : 30)。

(2) 積極的解釈

- ①「取り除く」という動詞（ギリシア語のアイロウ）の意味

*この動詞には、持ち上げる、取り上げるなどの意味がある。

*弱っている枝を持ち上げ、より多くの光と空気に触れさせる。

- ②すでに実を結んでいる枝は、より多くの実を結ぶために刈り込みをする。

II. 弟子とイエスの関係 (3~6 節)

1. 3 節

Joh 15:3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、すでにきよいのです。

- (1) ユダが離脱した後、残された 11 人に語られたことばである。

①彼らは、イエスにつながる「本物の枝」である。

②彼らは、イエスのことばによって清くされている。

③イエスのことばを信じるなら、義認と聖化を経験する。

④清めの手段は、みことば（聖書研究）である。

2. 4 節

Joh 15:4 わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。

- (1) 自然界のたとえを、霊的關係に適用する。

①相互の親密な關係性が示される。

②弟子たちは、「まことのぶどうの木」にとどまることで、実を結び続ける。

③弟子たちの責務は、イエスにとどまることである。

④自力で実を結ぶことは不可能である。

⑤実を結ばせてくださいではなく、イエスの中にとどまらせてくださいと祈る。

- (2)「とどまる」という動詞（メノウ）

①ヨハネの神学のキーワードのひとつである。

*ヨハネの福音書で 40 回、15 章で 11 回、書簡で 27 回出てくる。

*彼は、主イエスとの交わりを楽しんでいた。

②イエスとの關係を意識的に維持し続けることが、実を結ぶための条件である。

③新約聖書が教える実

*義の実（ピリ 1 : 11）

*伝道の実（コロ 1 : 5~10）

*御霊の実（ガラ 5 : 22~23）

(3) 神との関係構造

- ①父=農夫
- ②子=ぶどうの木
- ③信者=枝
- ④枝は、「とどまり続ける」ことによって実を結ぶ。

3. 5~6 節

Joh 15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。

Joh 15:6 わたしにとどまっていなければ、その人は枝のように投げ捨てられて枯れます。人々がそれを集めて火に投げ込むので、燃えてしまいます。

(1) 多くの実を結ぶための条件

- ①自分では何もできないという自覚
- ②イエスとの神秘的祈りの交流
 - * 私がイエスの内に、イエスが私の内に
- ③救いは恵みによって与えられるが、「実」はとどまりの生活によって与えられる。
 - * 弟子としていかに歩んだかが、将来の報奨に関係する。

(2) とどまらない者への警告 (6 節の解釈)

- ①信者であっても、救いを失う可能性がある。
 - * これは、聖書全体の教えと矛盾する。
- ②信仰は告白しているが、救われていない人のことである。
 - * しかし、この場面には信者しかいない。
- ③実を付けない信者が受ける評価のことである。
 - * 文脈上のテーマは、「救い」ではなく「とどまること」である。
 - * イエスにとどまって実を結ばないなら、その人の業績は火で焼かれる。
 - * その人自身は、救いを失わない (1 コリ 3 : 11~15)。

III. 従順と祝福の関係 (7~8 節)

1. 7 節

Joh 15:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら、何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。

(1) 弟子の祈りには力がある。

- ①イエスにとどまる。
- ②その人の内側には、イエスのことばがとどまる。
- ③それゆえ、その人は、父の御心の沿った祈りをするようになる。
- ④御心に沿った祈りは、叶えられる。
 - * 神の時がきたなら叶えられる。
 - * 祈りの精神が叶えられる。

2. 8 節

Joh 15:8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになります。

- (1) 聞かれた祈りは、弟子が結ぶ多くの実の一つである。
 - ①多くの実を結ぶことは、イエスの弟子であることの証明となる。
 - ②それによって、父が栄光をお受けになる。

IV. 愛と戒めの関係 (9~10 節)

1. 9 節

Joh 15:9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛にとどまりなさい。

- (1) イエスが弟子たちに示した愛の本質
 - ①父がイエスを愛したのと同じ愛である。
 - * 質、深さ、高さ、幅において同じである。
 - * それは、人知を超えた愛である。
 - ②イエスにとどまるとは、イエスの愛の中にとどまることである。
 - * 愛に基づいた交わりと従順のうちに生きることを意味する。
 - * 救いの維持ではなく、弟子としての親密さの維持である。

2. 10 節

Joh 15:10 わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっているのです。

- (1) イエスの愛にとどまるとは
 - ①イエスは、実に神秘的な命令を、具体的な形に置き換えた。
 - ②イエスの戒めを守ることが、イエスの愛にとどまることである。
 - ③手本は、父に従順な歩みをされたイエスご自身である。

(2) 3 者間の愛の流れ

- ①父が子を愛する（永遠で無条件の愛）
- ②子が信者を愛する（贖いと弟子道の中での愛）
- ③信者はキリストの愛の中にとどまる（応答的・従順的關係）

結論：今日の信者への適用

1. 努力の方向を変更する。

- (1) 私たちは、自分の力で靈的に成長しようとしがちである。
- (2) しかし、実を結ぶことは、キリストに「とどまる」ことからくる。
- (3) 聖書の学び、祈り、礼拝など、日常生活の中でキリストとの交わりを第一にする。

2. 試練を歓迎する。

- (1) 靈的剪定（訓練）を成長の機会と捉える。
- (2) 父なる神は、さらに実りある者とするために私たちを訓練される。
- (3) 不必要な執着や自己中心が取り除かれ、主に頼る謙遜さと力が養われる。

3. みことばの蓄積を心がける。

- (1) 現代は情報過多の時代である。
- (2) この世の情報ではなく、みことばを心に蓄える。
- (3) みことばに満たされることこそが、靈的浄化と力ある祈りにつながる。

4. 主イエスへの愛を具体的に表現する。

- (1) 現代人は、「愛＝感情」と捉えがちである。
- (2) イエスは、「愛＝従順によって保たれる関係」と教えている。
- (3) 日々の小さな従順（赦す・仕える・語る・耐える）が、愛の表現である。

ヨハネの福音書 (45)
「友とされた者の生き方」
ヨハ 15 : 11～17

1. 文脈の確認

(3) イエスの私的奉仕 (13 : 1～17 : 26)

①最後の晩餐 (13 : 1～30)

②階上の間の説教 (13 : 31～16 : 33)

*ぶどうの木にとどまる人生 (15 : 1～10)

*友とされた者の生き方 (15 : 11～17)

2. 注目すべき点

(1) イエスは私たちを友として選んでくださった。

(2) 3つの命令が与えられた。

「愛にとどまること」、「互いに愛し合うこと」、「実を結ぶこと」

3. アウトライン

(1) 喜びに満たされた人生 (11 節)

(2) 互いに愛し合う人生 (12～14 節)

(3) 友と呼ばれる人生 (15 節)

(4) 実を結ぶ人生 (16～17 節)

4. 結論：今日の信者への適用

友とされた者の生き方について学ぶ

I. 喜びに満たされた人生 (11 節)

1. 11 節

Joh 15:11 わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。

(1) 「これらのこと」 (15 : 1～10)

①ぶどうの木と枝のたとえ

②イエスの愛にとどまる。

(2) それを話した目的は、弟子たちが喜びに満たされるためである。

①イエスの喜びは、父なる神への従順から生まれたものである。

* イエスは、十字架を忍び、神の御座の右に着座された (ヘブ 12 : 2)。

③弟子たちは、イエスへの従順によって喜びを体験する。

④人間が神に対して従順になれば、神が喜びで満たしてくださる。

(3) 受難前夜に「喜びに満たされる」というテーマが取り上げられた。

①「イエスの喜び」は、状況に左右されないものである。

②3 種類の「喜びの源」

* ユダヤ人たちは、律法の義を求める。

* この世は、神を排除することで喜びを得ようとする。

* クリスチャンは、イエスとの親密な交わりによって喜びに満たされる。

II. 互いに愛し合う人生 (12~14 節)

1. 12~13 節

Joh 15:12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

Joh 15:13 人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。

(1) 「わたしの戒め」とは、互いに愛し合うことである。

①愛し続けることである。

②信者は、互いのことを心にかけ、互いの徳を立てることによって成長する。

③この戒めの新しい要素は、「わたしがあなたがたを愛したように」である。

④ヨハ 13 : 34

Joh 13:34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

⑤イエスの愛は、単に感情的なものではなく、歴史的事実である。

(2) イエスの愛は、友のためにいのちを捨てる愛である。

①ギリシア・ローマ世界では、友のために死ぬのは英雄物語である。

②ユダヤ教では、隣人のいのちよりも自分のいのちが大切だと教える。

③イエスの自己犠牲の愛は、ユダヤ教を超越したものである。

④この話をした直後に、イエスは十字架に向かう。

(3) イエスは信者に、友のために死ぬことを要求しているわけではない。

①もしそれが御心なら、その時に力が与えられる。

②私たちへの適用は、自己犠牲の愛の実践である。

- *時間を取って話を聞くこと
- *経済的な面も含めて援助すること
- *励ますこと
- *祈りで支えること

- ③自己犠牲の愛は、聖霊の助けによって可能となる。
- ④愛し合うことは単なる感情ではなく、実際の行動である。

2. 14 節

Joh 15:14 わたしが命じることを行うなら、あなたがたはわたしの友です。

(15 節で、この節を含めて解説します)

III. 友と呼ばれる人生 (15 節)

1. 15 節

Joh 15:15 わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。

- (1) 弟子たちは、「しもべ」から「友」に移行する。
 - ①しもべの関心事は、主人の命令に注意を払い、それを実行することである。
 - ②しもべと主人の間には、深い心の交流はない。
 - ③しもべは、主人の内面を知らなくても、仕事を行うことができる。
 - ④これまでの弟子たちの状態は、「しもべ」であった。
- (2) 弟子たちが「友」と呼ばれる理由は何か。
 - ①イエスは、父から聞いたことをみな彼らに知らせたからである。
 - *隠されていたものを開示した。
 - ②イエスと弟子たちの間には、深い心の交流がある。
 - *「友」とは、愛し合う者同士であり、信頼と対等さを保持する者同士。
- (3) 関係の質が、「命令と服従」から「信頼と共有」へと変化した。
 - ①命令に盲目的に従うだけの者ではなく、神のご計画の共同執行者となった。
 - ②「友」ということばには、「契約の友 (ḥabīb)」の概念がある。
 - *契約的忠実さと信頼関係に基づく親密な結びつきを表す。
 - *アブラハムは、「神の友」(ヤコ 2 : 23) と呼ばれた。
 - ・神の計画を知らされ、それに参与する存在
 - *ダビデとヨナタンは、「契約の友」(1 サム 18 : 1~4) であった。

・生死をかけた相互の契約関係

(4)「契約の友」とは、神とともに歩み、神の心を知り、神の計画に参加する者。

①教会の役割は、御心を知り、それを世に伝える「友としての証人」となること。

IV. 実を結ぶ人生 (16~17 節)

1. 16~17 節

Joh 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。

Joh 15:17 あなたがたが互いに愛し合うこと、わたしはこれを、あなたがたに命じます。

(1) イエスが弟子たちを選んだ。

①ユダヤ教の習慣では、弟子が師を選ぶ。

②イエスと弟子たちの関係は、それとは逆である。

③イエスが能動的に彼らを召された。選びの主権の強調がある。

④この選びは、「救いの選び」ではなく、「奉仕と使命の選び」である。

⑤「任命した」は、ギリシア語で「ティセイミ」である。

*英語で「ordain」「appoint」である。

*按手礼は、「ordination」である。

(2) 使命の内容

①「行って」

*命令に従って出て行く。

*イエス・キリストの福音を携えて世界に出て行く。

②「実を結ぶ」

*ヨハ 15 章全体の主題。霊的成果、福音伝道、御霊の実などを含意。

*実を結び続けるということ。

*その実はいつまでも残る。永遠の価値のある成果。

③「わたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださる」

*白紙委任の約束ではない。

*神からの使命を果たすという文脈の中で理解する必要がある。

*父は祈りに応えることによって、弟子たちの使命を全うさせてくださる。

(3) イエスとの友情関係

- ①イエスを愛する者は、兄弟をも愛する。
- ②兄弟愛の実践が、当然の義務としてそこに関わってくる。
- ③一匹狼のクリスチャンは、聖書的ではない。

結論：今日の信者への適用

1. 私たちは、キリストの喜びに満ちる者として召されている。
 - (1) 信仰生活は、苦行ではなく、キリストの喜びに満ちる生き方である。
 - (2) この「喜び」は、神との交わりと従順から生まれる満たされた喜びである。
 - (3) 感情や環境に振り回されるのではなく、「主の喜び」に根ざす人生を目指そう。
2. 私たちは、犠牲的愛（アガペー）を実行するように召されている。
 - (1) 「自分が受けたいように」ではなく、「主が愛されたように」愛する。
 - (2) 教会の一致と証しの力は、この「互いの愛」に根ざしている。
 - (3) 自分の権利・快適さ・プライドを捨てて他者を生かすことに召されている。
3. 私たちは、イエスの「友」として召されている。
 - (1) イエスが私たちを「友」と呼ばれるのは、親密な関係と啓示の共有に基づいている。
 - (2) 神のご計画を知り、それに参与する者として、「友」としての自覚を持つべき。
 - (3) 単なる従順ではなく、「主の心を知った上での従順」こそ、友としての歩み。
4. 私たちは、イエスによって選ばれた者として召されている。
 - (1) 私たちは、目的をもって選ばれた。
 - (2) 「実を結び、それが残る」は、信仰の実践、福音の証し、弟子訓練などを含む。
 - (3) 自分の存在と行動が、永遠の視点に根ざしているかどうかを問うべきである。

ヨハネの福音書 (46)
「世にある証し人の生き方」
ヨハ 15 : 18~16 : 4

1. 文脈の確認

(3) イエスの私的奉仕 (13 : 1~17 : 26)

①最後の晩餐 (13 : 1~30)

②階上の間の説教 (13 : 31~16 : 33)

*ぶどうの木にとどまる人生 (15 : 1~10)

*友とされた者の生き方 (15 : 11~17)

*世にある証し人の生き方 (15 : 18~16 : 4)

2. 注目すべき点

(1) 十字架にかかる前夜、弟子たちに厳しい現実が告げられる。

(2) 迫害が襲うが、主からの助けも用意される。

(3) 今日の信者への適用が多く含まれる。

3. アウトライン

(1) 世の憎しみを覚悟せよ (15 : 18~21)

(2) 世の罪は暴かれることを知れ (15 : 22~25)

(3) 御霊とともに証しせよ (15 : 26~16 : 4)

4. 結論：今日の信者への適用

クリスチャンは、この世にあってキリストを証しすることができる。

I. 世の憎しみを覚悟せよ (15 : 18~21)

1. 18 節

Joh 15:18 世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。

(1) ヨハネの福音書の「世」とは何か。

①ギリシア語で「コスモス」という。

*宇宙 (被造世界)、地の住人 (人類)、神に敵対する組織化された社会

②ここでの「世」とは、第3番目の意味である。

③サタンの支配下に置かれている。

④ヨハ 14 : 30

Joh 14:30 わたしはもう、あなたがたに多くを話しません。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることができません。

(2) 神の友である人は、この世から見たら「敵」である。

①この世と調子を合わせることは、神の敵になることである。

②ヤコ 4 : 4

Jas 4:4 節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。

(3) 世の憎しみに遭ったとき、思いがけないことが起こったと思うべきではない。

①イエス自身が、先に世の憎しみを経験している。

②幼子イエスは、ヘロデ大王に殺されそうになった。

③今は、十字架につけられようとしている。

④迫害は、仮定のことではない。イエスに従う者は、迫害に遭う。

2. 19 節

Joh 15:19 もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。

(1) この世が信者を憎むのは、信者に対して異質なものを感じるからである。

①信者は、闇の王国から解放され、神の王国に移された。

②信者は、新しい喜び、目的、希望、愛を見出した。

③信者は、この世の人たちとは異なったライフスタイルを持っている。

④信者は、この世にしながら、この世のものではない。

⑤信者は、霊的に新しいアイデンティティを持つようになった。

(2) 世は、自分たちと同質なものを愛する。

①粗暴なことば（日常会話、ネット上の書き込み）

②肉欲

③教養ある人であっても、自分のためにだけ生きている。

④SNS 文化、個人主義、快楽主義

(3) 信者はイエスによって選ばれた人たちである。

①信者は、その生き方を通してこの世の人たちを裁く。

②それゆえ、この世の人たちは信者を憎むのである。

3. 20~21 節

Joh 15:20 しもべは主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたも迫害します。彼らがわたしのことばを守ったのであれば、あなたがたのことばも守ります。

Joh 15:21 しかし彼らは、これらのことをすべて、わたしの名のゆえにあなたがたに対して行います。わたしを遣わされた方を知らないからです。

(1) 「しもべは主人にまさるものではない」 (ヨハ 13 : 16 の教え)

①信者は、主イエスに倣って「しもべ」となる必要がある。

②この教えには、別の適用がある。

* イエスを憎む者は、弟子たちをも憎む。

(2) この世の人たちが信者を迫害する理由

①イエスを遣わした父なる神を知らないので、イエスを憎む。

②イエスへの憎しみを、弟子たちに向ける。

③彼らに対して怒りではなく、憐みの心を持つ。

II. 世の罪は暴かれることを知れ (15 : 22~25)

1. 22~23 節

Joh 15:22 もしわたしが来て彼らに話さなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。けれども今では、彼らの罪について弁解の余地はありません。

Joh 15:23 わたしを憎んでいる者は、わたしの父をも憎んでいます。

(1) イエスが到来する前と後の違い

①到来する前なら、まだ弁解の余地があった (無知を言い訳にできた)。

* 「罪はない」とは、無罪だということではなく、罪の度合いの問題である。

* 啓示の量が増えると、倫理的責任も増える。

②到来して以降は、弁解の余地はない。

* イエスは神のことばを語り、メシア性を証明する奇跡を行われた。

* イエスにはなんの罪もなかった。

* にもかかわらず、彼らはイエスを信じなかった。

(2) 主イエスは、父なる神を啓示するために来られた。

①イエスを憎む者は、父なる神をも憎む者である。

5. 24~25 節

Joh 15:24 もしわたしが、ほかのだれも行っただことのないわざを、彼らの間で行わなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。けれども今や、彼らはそのわざを見て、そのうえでわたしとわたしの父を憎みました。

Joh 15:25 これは、『彼らはゆえもなくわたしを憎んだ』と、彼らの律法に書かれていることばが成就するためです。

(1) これは、22~23 節の詳細な説明である。

- ①イエスは、多くの奇跡を行い、ご自身のメシア性を証明された。
- ②しかし、イスラエルの民は光よりも闇を愛したので、イエスを拒否した。
- ③ニコデモの応答は、例外的なものである。

(2) 罪というのは、基本的に非理性的で、理屈に合わないものである。

- ①公の場でのクリスマス拒否
- ②彼らの不信仰は、旧約聖書に預言されていた。
- ③ダビデによる預言（義人の嘆き）

Psa 69:4 ゆえなく私を憎む者は／私の髪の毛よりも多く／私を滅ぼそうとする者／私の敵偽り者は強いのです。／私は 奪わなかった物さえ／返さなければならぬのですか。

④詩 35 : 19、109 : 3 など参照

Ⅲ. 御霊とともに証しせよ (15 : 26~16 : 4)

1. 26~27 節

Joh 15:26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてくださいます。

Joh 15:27 あなたがたも証しします。初めからわたしと一緒にいたからです。

(1) 弟子たちへの励ましのことば

- ①弟子たちは、イエスについて証しする。
- ②御霊は、弟子たちを通して働く。
- ③御霊の働きは、単なる慰めではなく、イエスを証言する宣教的役割である。

(2) 三位一体の働きの一致

- ①父から出て、子によって遣わされる御霊
- ②三位の神が協業して、救いと証しの業を進める。

(3) 使徒たちの証しは「歴史的・目撃的」。

- ①使徒たちは、イエスの生涯をともに歩んだ証人である。
- ②その証言は、信仰の土台である。

③使徒的証言は、新約聖書の信頼性と権威の根拠でもある。

2. 1～2 節

Joh 16:1 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがつまづくことのないためです。

Joh 16:2 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。

(1) 迫害の予告をする理由

- ①つまづくことがないためである。
- ②弟子たちは、メシア的王国の希望を持っていた。
- ③イエスの死と復活の後に起こることは、想定外のことである。
- ④しかし、苦難は当然のこととして受け止めるべきである。

(2) 迫害の内容

①会堂からの追放

- * ユダヤ人にとっては、最悪の悲劇である。
- * ユダヤ人共同体からの追放である。
- * 紀元 85 年から 90 年の間に、会堂での祈りに変化があった。
- * 「シュモネ・エスレ」という伝統的な祈り
- * 元来は 18 の祈りから成っていたが、第 19 番目が追加された。
- * それは、メシアニックジューを追い出すための祈りである。

「背教者からすべての希望を取り去りたまえ。分派を作る者は、直ちに滅ぶべし」

②殉教の死

- * ステパノ (使 7 章)
- * ヤコブ (使 12 章)
- * サウロによる迫害 (使 9 章)

(3) 迫害の理由は、それが神への奉仕だと誤解していること。

- ①サウロがその例である。

3. 3～4 節

Joh 16:3 彼らがそういうことを行うのは、父もわたしも知らないからです。

Joh 16:4 これらのことをあなたがたに話したのは、その時が来たとき、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。／わたしは初めからこれらのことを話すことはしませんでした。それはあなたがたとともにいたからです。

- (1) 迫害の根本的な理由は、父なる神を知らないことである。
 - ①父を知らない人は、イエスをも知らない。
 - ②イエスを知らない人は、イエスの弟子たちの教えを受け入れない。
- (2) イエスが迫害を予告した理由は、弟子たちがそれを思い出すためである。
 - ①これまでイエスは迫害について語ってこなかった。
 - ②この世の憎しみは、イエスに向けられていた。
 - ③イエスがいなくなると、イエスの地上におけるからだである教会が誕生する。
 - ④この世は、イエスのからだである教会を憎むようになる。

結論：今日の信者への適用

- 1. クリスマンは、世と対立する覚悟が必要である。
 - (1) 聖書的価値観に立てば立つほど、世的価値観とのギャップは広がる。
 - (2) 神の恵みによる選びは、世との決定的断絶を意味する。
 - (3) 嫌われることを嘆くよりも、主と同じ歩みをしていることを誇ろう。
- 2. 敵意の背後には、霊的無知があることを知ろう。
 - (1) 迫害は、世がキリストを知らないがゆえに起こる。
 - (2) 相手を裁く前に、憐れみと祈りの心をもって接しよう。
 - (3) 私たちもかつてはそのような者であった。
- 3. 真理を語る者は、罪を暴くがゆえに憎まれることを知ろう。
 - (1) 聖書の真理は、人の罪を照らす。
 - (2) それに反発があるのは自然な反応である。
 - (3) クリスマンの存在そのものが「光」である。
- 4. 真理を語る者には、御霊の助けがある。
 - (1) 迫害される者が、御霊によって証し人とされる。
 - (2) 聖霊は常に、証しの場において信者を助け、語らせてくださる。
 - (3) 自分の力に頼るのではなく、御霊への信頼に立って証ししよう。

ヨハネの福音書 (47)

「助け主に導かれる人生」

ヨハ 16 : 5～15

1. 文脈の確認

(3) イエスの私的奉仕 (13 : 1～17 : 26)

①最後の晩餐 (13 : 1～30)

②階上の間の説教 (13 : 31～16 : 33)

*ぶどうの木にとどまる人生 (15 : 1～10)

*友とされた者の生き方 (15 : 11～17)

*世にある証し人の生き方 (15 : 18～16 : 4)

*助け主に導かれる人生 (16 : 5～15)

2. 注目すべき点

(1) 十字架にかかる前夜、弟子たちに聖霊の約束が告げられる。

(2) 聖霊は、イエスの働きを継続し、深化させる方である。

(3) ディスペンセーションは、律法の時代から恵みの時代に移行しつつある。

(4) この箇所は、聖霊論の中心となる箇所である。

(5) クリスマンは、聖霊に導かれた人生を歩むことができる。

3. アウトライン

(1) 聖霊が派遣される (5～7 節)

(2) 聖霊の世に対する働きがある (8～11 節)

(3) 聖霊の弟子たちに対する働きがある (12～15 節)

4. 結論：今日の信者への適用

クリスマンは、聖霊に導かれた人生を歩むことができる。

I. 聖霊が派遣される (5～7 節)

1. 5～6 節

Joh 16:5 しかし今、わたしは、わたしを遣わされた方のもとに行こうとしています。けれども、あなたがたのうちだれも、『どこに行くのですか』と尋ねません。

Joh 16:6 むしろ、わたしがこれらのことを話したため、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。

(1) 弟子たちは悲しみに満たされた。

- ①この世から受ける憎しみについての予告があった。
 - ②イエスが去って行くので、この世からの憎しみは弟子たちに向けられる。
 - ③彼らは、自分たちの将来に関して悲しみに満たされた。
 - * イエスなしにはやって行けないと考えた。
 - ④彼らは、イエスの将来については、さほどの関心を示さなかった。
 - ⑤イエスが去って行く理由と行先を知っていたなら、喜びに満たされたはず。
- (2) 彼らは、「どこに行くのですか」と尋ねなかった。
- ①トマスでさえも、尋ねなかった。
 - ②ヨハ 14 : 5
- (3) 彼らは、時代が移行しつつあることを理解することができなかった。
- ①「今」という時を理解できなかった。
 - ②イエスの死、埋葬、復活、昇天という出来事の重要性を理解できなかった。

2. 7 節

Joh 16:7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。

- (1) イエスが去って行くことは、弟子たちにとって益である。
- ①イエスの死、埋葬、復活、昇天
 - ②それがなければ、伝えるべき福音が存在しないことになる。
 - ③昇天がなければ、イエスが栄光の座に着くこともない。
 - ④イエスが栄光の座に着かなければ、聖霊が降臨することもない。
- (2) 栄光の座に着いたイエスは、聖霊を弟子たちのところに遣わされる。
- ①これまでも、聖霊は常に働いておられた。
 - ②しかし、ペンテコステの日以降、聖霊は新次元の働きを開始する。
 - ③イエス（わたし）が聖霊を遣わされる。
 - ④聖霊は、「助け主」と呼ばれている。
 - * イエスが去った後の聖霊の働きは、「助け主」としてのそれである。
- (3) 適用：悲劇が祝福をもたらす場合もある。

II. 聖霊の世に対する働きがある (8~11 節)

1. 8 節

Joh 16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます。

(1) 「エケイノス」は、「その方」とも「それ」とも訳せる。

①聖霊は第3位格の神である。

(2) 聖霊の働きの中心は、過ちを認めさせることである。

①これは、回心 (conversion) ではなく、認罪 (conviction) である。

②認罪は、回心に先立つ。

③聖霊は、通常、信者を通して働かれる。

2. 9～11 節

Joh 16:9 罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。

Joh 16:10 義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。

Joh 16:11 さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。

(1) 罪について

①罪とは、神への反抗である。

②イエスを十字架につけたのは、その反抗が頂点に達したということである。

③人々が容易に罪を認めないのは、神に反抗しているという意識がないから。

④現代の私たちが犯す罪とは何か。

*キリストへの不信仰

Joh 3:18 御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。

*神の真理をはばんでいる (妨げている) こと

Rom 1:18 というのは、不義によって真理を阻んでいる人々のあらゆる不敬虔と不義に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。

⑤聖霊は、人々に罪を認めさせる。

⑥聖霊の到来そのものが、人々の罪を証明している。

*人々がイエスを拒否し十字架につけたので、聖霊が来られた。

(2) 義について

①ユダヤ人たちは、イエスは悪霊に憑かれていると主張した。

②イエスが不義であると信じたので、十字架にかけた。

③ガラ 3 : 13 と申 21 : 23

Gal 3:13 キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。「木にかけられた者はみな、のろわれている」と書いてあるからです。

- ④しかし、復活と昇天は、イエスが義であることを証明した。
- ⑤イエスの復活が伝えられるとき、聖霊は、イエスが義であることを証しする。
- ⑥イエスの復活と昇天により、サタンは大打撃を被った。

(3) 裁きについて

- ①イエスの死と復活は、この世の支配者であるサタンを裁くものとなった。

Col 2:15 そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。

- ②「死の力を持つ悪魔」は滅ぼされた（ヘブ 2 : 14）。

* 悪魔は今も活動しているが、それは刑期を待つ死刑囚のような状態である。

- ③神に反抗する者は、悪魔が裁かれたことを知るべきである。
- ④悪魔と罪人に下ろうとしている裁きを恐れるべきである。

III. 聖霊の弟子たちに対する働きがある (12～15 節)

1. 12～13 節

Joh 16:12 あなたがたに話すことはまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐えられません。

Joh 16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。御霊は自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語り、これから起こることをあなたがたに伝えてくださいます。

(1) 弟子たちの霊性には限界があった。

- ①彼らは、メシア的王国での栄誉を求めていた。
- ②自分たちの将来に不安を感じていた。
- ③イエスの死と復活が必要とは思っていなかった。

(2) 真理の御霊の役割

- ①イエスとその御業についての真理を弟子たちに教える。
- ②父なる神から聞いたことだけを話す。

* 三位一体の神の位格は、独立している。

* 父が御子に関する真理を聖霊に語り、聖霊がそれを弟子たちに教える。

- ③やがて起ころうとしていることを弟子たちに示す。

* この中には、終末論の情報が含まれている（新約聖書の中の預言）。

* これは、新約聖書が完成することの保証である。

6. 14～15 節

Joh 16:14 御霊はわたしの栄光を現されます。わたしのものを受けて、あなたがたに伝えてくださるのです。

Joh 16:15 父が持っておられるものはすべて、わたしのものです。ですからわたしは、御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに伝えると言ったのです。

(1) 御霊の役割は、イエスの栄光を現すことである。

- ①これは、クリスチャンの奉仕や集会を評価するための基準である。
- ②イエスの御名があがめられているなら、それは聖霊が働いている証拠である。
- ③聖霊に関心が向いているなら、この基準からは逸脱している。

* 聖霊に祈ることは、聖書が示す標準的なパターンではない。

(2) 御霊は、イエスに関する真理を教える。

- ①イエスに関する真理は、すべて父から出たものである。
- ②父のものはイエスのものであり、イエスのものは父のものである。
- ③ここには、三位一体の神の統一性と調和がある。

結論：今日の信者への適用

1. 悲劇の中に神の計画が隠されている。

- (1) イエスの「去る」ことは、聖霊の到来のための準備であった。
- (2) 私たちの痛みや喪失にも神の目的がある。
- (3) 試練の中で、「今は分からないが、後でわかる」(13:7) という信仰が求められる。

2. 福音宣教の主役は聖霊である。

- (1) 現代の社会は、「罪」「義」「さばき」といった概念を拒否する。
- (2) 聖霊は、人々に罪を示し、義を啓示し、裁きの現実を教えている。
- (3) 伝道の主語は「聖霊」であり、私たちは証人として語るだけである。

3. 聖霊は、私たちをキリストをあがめる人生へと導く。

- (1) 聖霊は、自分を主張せず、キリストをあがめる働きをする。
- (2) 聖霊の導きは、聖書に親しみ、主の御声を聞こうとする姿勢の中に実現する。
- (3) 家庭での祈り、職場での誠実、礼拝での畏敬などを吟味しよう。

ヨハネの福音書 (48)
「恵みの時代の霊的祝福」
ヨハ 16 : 16～33

1. 文脈の確認

(3) イエスの私的奉仕 (13 : 1～17 : 26)

①最後の晩餐 (13 : 1～30)

②階上の間の説教 (13 : 31～16 : 33)

*ぶどうの木にとどまる人生 (15 : 1～10)

*友とされた者の生き方 (15 : 11～17)

*世にある証し人の生き方 (15 : 18～16 : 4)

*助け主に導かれる人生 (16 : 5～15)

*恵みの時代における祝福 (16 : 16～33)

2. 注目すべき点

(1) ディスペンセーションが移行すると、新しい霊的真理が導入される。

(2) 律法の時代から恵みの時代への移行が起ころうとしている。

(3) 恵みの時代は、教会時代であり、聖霊が中心的に働く時代である。

3. アウトライン

(1) 悲しみから喜びへ (16～22 節)

(2) 新しい祈りの方法へ (23～28 節)

(3) 患難から平安へ (24～33 節)

恵みの時代における新しい祝福を知ろう。

恵みの時代の 3 つの祝福に着目する。

I. 悲しみから喜びへ (16～22 節)

1. 16 節

Joh 16:16 しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなりますが、またしばらくすると、わたしを見ます。」

(1) 聖霊の働きというテーマから、すぐに起こることの予告へと移行する。

①最初の「しばらくすると」は、イエスの逮捕から十字架、死に至る時間を指す。

②次の「しばらくすると」は、3 日目の復活までの時間である。

2. 17～18 節

Joh 16:17 そこで、弟子たちのうちのある者たちは互いに言った。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見る』、また『わたしは父のもとに行くからだ』と言われるのは、どういうことなのだろうか。」

Joh 16:18 こうして、彼らは「しばらくすると、と言われるのは何のことだろうか。何を話しておられるのか私たちには分からない」と言った。

(1) 弟子たちには、イエスの教えは不可解であった。

- ①「しばらく」、「またしばらく」、「父のもとに行く」
- ②これは、十字架、復活、昇天の預言である。
- ③弟子たちのメシア理解とは一致しなかった。

(2) 彼らは、イエスに質問するのではなく、互いに議論し合った。

- ①この状況は、聖霊の働きの必要性と連動している (16 : 13～15)。
- ②ペンテコステ前の彼らは、霊的洞察力に欠けていた。

3. 19～20 節

Joh 16:19 イエスは、彼らが何かを尋ねたがっているのに気づいて、彼らに言われた。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見る』と、わたしが言ったことについて、互いに論じ合っているのですか。

Joh 16:20 まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜びます。あなたがたは悲しみます。しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。

(1) 「気づいて」は、ギリシア語の「エグノウ」で、完全に知ったという意味。

- ①イエスの全能性が示されている。

(2) イエスは、弟子たちの疑問には直接答えず、別の情報を追加した。

- ①「まことに、まことに」は、厳粛な予告をする際のことばである。
- ②弟子たちは、イエスの死を嘆き悲しむ。
- ③この世 (ユダヤ人指導者層、ローマ当局、サタンの勢力) はそれを喜ぶ。
- ④しかし、弟子たちの悲しみは喜びに変わる。復活の預言。

(3) 教訓

- ①一時的な敗北に見える中にこそ神の勝利が隠されている。
- ②メシアの二面性—苦難のしもべと勝利の王を体験する第一歩である。

4. 21～22 節

Joh 16:21 女は子を産むとき、苦しみます。自分の時が来たからです。しかし、子を産んでし

まうと、一人の人が世に生まれた喜びのために、その激しい痛みをもう覚えていません。
Joh 16:22 あなたがたも今は悲しんでいます。しかし、わたしは再びあなたがたに会います。
そして、あなたがたの心は喜びに満たされます。その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。

(1) 悲しみや痛みが喜びに変わる例として、女性の出産が上げられる。

①赤子が生まれると、妊婦はすぐに激しい苦痛を忘れる。

(2) 弟子たちは、陣痛の時を迎えているが、やがて喜びに満たされる。

①復活のイエスに出会ったときに、それが起こる。

②その喜びは、いつまでも続く。イエスが永遠に生きるから。

(3) 教訓

①この喜びは、聖霊による復活の確信からくる信仰的喜びである。

②この喜びは、新約における内的祝福の一部であり、環境に左右されない。

II. 新しい祈りの方法へ (23～28 節)

1. 23～24 節

Joh 16:23 その日には、あなたがたはわたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしの名によって父に求めるものは何でも、父はあなたがたに与えてくださいます。

Joh 16:24 今まで、あなたがたは、わたしの名によって何も求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けます。あなたがたの喜びが満ちあふれるようになるためです。

(1) 「その日」とは、聖霊降臨後の時代（教会時代）である。

①イエスに直接問う必要がなくなる。

②弟子たちは、イエスの代理人として、イエスの名によって父に求める。

③これまで弟子たちは、イエスの名による祈りを知らなかった。

(2) 「イエスの名によって求める」とは、「おまじない」ではない。

①イエスの意図に沿って求めるのである。

②「イエスの名による祈り」は、父なる神の御心と調和した祈りである。

③イエスの名によって祈り、答えられる経験が、信者の内的な喜びを完全にする。

(3) 教訓

①イエスの名による祈りは、新約の特権であり、教会の霊的祝福の中心である。

②この喜びは、外的状況による一時的なものではなく、持続的な内的喜びである。

2. 25 節

Joh 16:25 わたしはこれらのことを、あなたがたにたとえて話しました。もはやたとえて話すのではなく、はっきりと父について伝える時が来ます。

(1) イエスは、ベルゼブル論争（マタ 12 章）以降、たとえて教えた。

- ①一般民衆は、その意味が理解できなかった。
- ②弟子たちには、個人的な解説が与えられた。

(2) たとえではなく、はっきりと話す時が来る。

- ①聖霊降臨以降に、それが実現する。
- ②イエスの名による祈りに加え、父なる神について明瞭に教えられる特権が教会に与えられる。
- ③パウロ書簡には、神の奥義の啓示が記されている。

3. 26～27 節

Joh 16:26 その日には、あなたがたはわたしの名によって求めます。あなたがたに代わってわたしが父に願う、と言うものではありません。

Joh 16:27 父ご自身があなたがたを愛しておられるのです。あなたがたがわたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからです。

(1) 弟子たちは、イエスの名によって、直接父に願うことができる。

- ①イエスが弟子たちに代わって父に願うのではない。
- ②これは、イエスの大祭司としての働きを否定しているのではない。

(2) 弟子たちはイエスを信じたので、父なる神と愛の関係に入っている。

- ①信者は、神の家族の一員として受け入れられた。
- ②その根拠は、救いの信仰告白である。

4. 28 節

Joh 16:28 わたしは父のもとから出て、世に来ましたが、再び世を去って、父のもとに行きます。」

(1) これは、イエスの使命を一文で要約したものである（原文では一文）。

- ①前半は、受肉と辱めを表している。
- ②後半は、復活、昇天、栄化を表している。

(2) これは、イエスの神性宣言である。

- ①預言者たちは神から派遣されたが、御子は「父のもとから出た」。
- ②父との本質的關係と神的起源が強調されている。

Ⅲ. 患難から平安へ (29～33 節)

1. 29～30 節

Joh 16:29 弟子たちは言った。「本当に、今あなたははっきりとお話くださり、何もたとえでは語られません。

Joh 16:30 あなたがすべてをご存じであり、だれかがあなたにお尋ねする必要もないことが、今、分かりました。ですから私たちは、あなたが神から来られたことを信じます。」

- (1) 弟子たちは、イエスの教えをようやく理解した。
 - ①イエスがたとえではなく、はっきりと話したから。
 - ②この反応は、自己尚早である。
 - ③真の理解は、聖霊による啓示によって可能となる。
- (2) イエスが全能のお方であることを理解した。
 - ①イエスは、「わたしは父から出て」と言われた。
 - ②弟子たちは、「あなたが神から来られたことを信じます」と応じた。
 - ③しかし、弟子たちの告白は、十字架の衝撃に耐えるほど成熟していない。

2. 31～32 節

Joh 16:31 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは今、信じているのですか。

Joh 16:32 見なさい。その時が来ます。いや、すでに来ています。あなたがたはそれぞれ散らされて自分のところに帰り、わたしを一人残します。しかし、父がわたしとともにおられるので、わたしは一人ではありません。

- (1) イエスは、弟子たちの信仰の不完全さを知っていた。
 - ①「今、信じていると思っているのか」。皮肉を含んだ反語的疑問。
 - ②散らされて、イエスを一人残す時が来る。
 - ③ゼカ 13 : 7 の預言

Zec 13:7 剣よ、目覚めよ。わたしの羊飼いに向かい、わたしの仲間に向かえ——万軍の【主】のことば——。羊飼いを打て。すると、羊の群れは散らされて行き、わたしは、この手を小さい者たちに向ける。

- (2) 父がともにおられるので、イエスは孤独ではない。
 - ①マタ 27 : 46 の瞬間的断絶は別。

Mat 27:46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、

「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

3. 33 節

Joh 16:33 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」

(1) 「これらのこと」とは、ヨハ 14~16 章の内容である。

①ディスペンセーションが移行しつつある。

②弟子たちは、苦難を通過する。

(2) イエスに従う者の二面性

①キリストにある。この世にある。

②この世にあっては患難がある。キリストにあっては平安がある。

③教会時代の普遍的特徴である。

(3) イエスはすでに世に勝った (完了形)。

①この世の支配者 (悪魔) を打ち破った。

②イエスに従う者は、勇敢な者になることができる。

③階上の間の説教のクライマックスは、世に対する勝利である。

結論：今日の信者への適用 (恵みの時代の 3 つの祝福)

1. 苦しみは一時的、喜びは永遠

(1) 信仰生活において、「見えない主」による試練の時がある。

(2) しかし、その「しばらく」は神のご計画の中の一時に過ぎない。

(3) 苦しみの後には、神の目的にかなった喜びが備えられている。

2. 父への直接の祈りという特権

(1) 信者は、イエスの御名によって父に直接祈ることができる。

(2) それは仲介者を必要としない、神との親密な交わりのしるしである。

(3) 祈りは、喜びを満たす手段である。

3. 勝利はすでに成就している

(1) キリストの十字架と復活は、決定的な勝利を確立した。

(2) 信者は、その勝利の中に生きている。

(3) 勝利の確信が信仰の力となる。

ヨハネの福音書 (49)

「大祭司の祈り (1) イエス自身のための祈り」

ヨハ 17 : 1~5

1. 文脈の確認

- (1) 前書き (1 : 1~18)
- (2) イエスの公生涯 (1 : 19~12 : 50)
- (3) イエスの私的奉仕 (13 : 1~17 : 26)
 - ①最後の晩餐 (13 : 1~30)
 - ②階上の間の説教 (13 : 31~16 : 33)
 - ③大祭司の祈り (17 : 1~26)

2. 注目すべき点

- (1) 弟子たちへの教えは、勝利のことばで終わった。
 - ①「わたしはすでに世に勝ちました」(ヨハ 16 : 33)
 - ②十字架、復活、昇天が予見されている。
- (2) この段階で、イエスの働きは預言者から祭司に移行した。
- (3) ここでの祈りは、聖書の中の最高の祈りである。
 - ①イエスの心の中を明らかにした祈りである。
 - ②人間が創作できるような内容の祈りではない。

3. アウトライン (大祭司の祈り)

- (1) イエス自身のための祈り (17 : 1~5)
- (2) 弟子たちのための祈り (17 : 6~19)
- (3) 将来の信者たちのための祈り (17 : 20~26)

今回は、(1) を取り上げる。

大祭司の祈りから教訓を学ぶ。

イエス自身の祈りから、信仰の本質について学ぶ。

I. イエス自身のための祈り (1~5 節)

1. 1 節

Joh 17:1 これらのことを話してから、イエスは目を天に向けて言われた。「父よ、時が来ました。子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。

- (1) 「これらのことを話してから」

- ①ヨハ 14~16 章の弟子たちへのメッセージを終えてから。

②場所は、ゲツセマネの園の近くであろう。

(2)「目を天に向けて」

- ①私たちの場合は、頭を垂れ、目を閉じて祈ることが多い。
- ②しかし、旧約聖書には、そのような祈りの姿勢を記した箇所は存在しない。
- ③旧約聖書の祈りの姿勢
 - *手を上げて祈る。
 - *ひざまずく。
 - *地にひれ伏す。
 - *立って祈る。
- ④イエスは、天に向かって顔を上げ、手を挙げて祈られた。
- ⑤これは大祭司としての祈りの開始点である。

(3)「父よ」

- ①「パテラ」。親密で人格的な呼びかけ。
- ②イエスは、合計 6 回、父に呼びかけている。
 - *「父よ」 1、5、21、24 節
 - *「聖なる父よ」 11 節
 - *「正しい父よ」 25 節
- ③イエスの祈りは、直接父なる神に祈るものである。
- ④信者は、父なる神に対して、イエス・キリストを通して、聖霊に導かれて祈る。

(4)「時が来ました」

- ①「ホウラ」とは、定められた救いの計画の時、十字架の時である。
- ②それまでは、「時」はまだ来ていなかった。
 - *イエスの敵は、イエスを逮捕することができなかった。
 - *ヨハ 2 : 4、7 : 6、7 : 8、7 : 30、8 : 20
- ③今、イエスの時が来た (完了形)。
 - *ヨハ 12 : 23、13 : 1、17 : 1

(5)「子の栄光を現してください」

- ①イエスの心の中を見ることができる。
- ②十字架という苦難が、実は神の栄光の最高の現れであるという逆説的真理。
 - *父がイエスの犠牲の死を受け入れること
 - *父がイエスを復活させること

*昇天によって、イエスが栄光の座に着くことに

(6) 「子があなただの栄光を現すために、」

- ①原文の語順に従って解説している。
- ②イエスは、自分の願いの目的を明らかにした。
- ③罪人が新生し、神をたたえるようになることは、父に栄光をもたらす。
- ④イエスの祈りは、三位一体的協働の枠組みで理解すべきである。

(7) 1 節から得られる教訓

(例話) 他者のために祈る祈りに感動し、信仰に導かれた人のエピソード

- ①自分のために祈ることは、利己的なことではない。
- ②利己的な祈りとは、自分の繁栄だけを求める祈りである。
- ③他者のために祈る前に、自分の心と行いが神と調和している必要がある。
- ④自分のための祈りは、楽器の調律と同じである。
- ⑤魂の調律が終わった人は、効果的な祈りを献げることができる。

2. 2~3 節

Joh 17:2 あなたは子に、すべての人を支配する権威を下さいました。それは、あなたが下さったすべての人に、子が永遠のいのちを与えるためです。

Joh 17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。

(1) 父は子に、すべての人を支配する権威を与えた。

- ①詩 2 篇のテーマ (メシア的詩篇)
- ②父は子に、裁きを行う権威を与えた (ヨハ 5 : 27)。
- ③子は、父からいただいたすべての者に、永遠のいのちを与える。
- ④信者は、「あなたがくださった」人である (同じ表現が 5 回出て来る)。

* 2 節、6 節 (2 回)、9 節、24 節

⑤救いの教理の二面性

- * 天地が造られる前から、父はキリストに属する者を選んでおられる。
- * 神は、すべての人を招いておられる (信仰によって救われない人はいない)。

(2) イエスによる永遠のいのちの定義

- ①パリサイ人たちは、神の国に入ることが「永遠のいのち」だと考えていた。
- ②一般的には、いつまでも続くいのちである。

* しかし、永遠のいのちとは、永遠に存在し続けることではない。

*すべての者は、永遠に存在し続ける。

*どこで、どのような状態で存在し続けるかが問題である。

③永遠のいのちとは、唯一のまことの神を知ること。

*「唯一のまことの神」とは、偶像を排除したことばである。

④そして、父が遣わされたイエス・キリストを知ること。

*ユダヤ的な一神教の枠組みに、子なる神の存在と贖いを組み込む構造。

*メシアニックジューにとっては、極めて重要なキリスト論的認識である。

⑤永遠のいのちとは、イエス・キリストを通して与えられる「神との平和」。

⑥「知る」とは、親密な個人的関係を指す動詞である。

⑦ユダヤ的には、「来るべき世」への参加が、「永遠のいのち」である。

⑧イエスによって、永遠のいのちは、今ここで始まる霊的リアリティとなった。

3. 4~5 節

Joh 17:4 わたしが行うようにと、あなたが与えてくださったわざを成し遂げて、わたしは地上でああなたの栄光を現しました。

Joh 17:5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。

(1) イエスの自分自身のための祈りは、使命の完了を前提としたものである。

①イエスは、父がイエスに与えた使命を成し遂げた。

②十字架の死が確実なこととして語られている。

(2) イエスの願いは、受肉前の栄光への回帰である。

①世界が存在する前から、子は父といっしょに栄光を持っていた。

②受肉は、「メシアの辱め」の始まりである。

③十字架は、「メシアの辱め」の終わりである。

(3) イエスが栄光を求めた理由は、父の栄光が現れるためである。

①イエスは、受肉期間にご自身の栄光を隠された。

②山頂での変貌が、唯一の例外である。

③イエスは、父に従順に歩むことによって父の栄光を現された。

④神の義、力、愛が証明されることは、神の栄光につながる。

⑤人間の生きる目的は、神の栄光を現すことである。

⑥ロマ 11 : 36

Rom 11:36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

⑦1 コリ 10 : 31

1Co 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。

⑦エペ 1 : 11~12

Eph 1:11 またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。すべてをみこころによる計画のままに行う方の目的にしたがい、あらかじめそのように定められていたのです。

Eph 1:12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。

結論：今日の信者への適用

1. 「神の時」を認識する。

- (1) イエスは、十字架という最大の苦難を「神の時」として受け入れた。
- (2) 試練や困難の中にあっては、「神の時」を認識する霊性が求められる。

2. 「永遠のいのち」を今ここで味わう。

- (1) 永遠のいのちは、死後の状態ではなく、今ここで始まる神との交わりのいのち。
- (2) 「知る」は、親密で人格的な関係を表す。日々の「知り合う」歩み。

3. 主の栄光を現す生き方を選ぶ。

- (1) イエスの使命は、御父の栄光を明らかにすることであった。
- (2) 私たちの人生の目的も、神の栄光を映すことである。

ヨハネの福音書 (50)

「大祭司の祈り (2) 弟子たちのための祈り」

ヨハ 17 : 6～19

1. 文脈の確認

- (1) 前書き (1 : 1～18)
- (2) イエスの公生涯 (1 : 19～12 : 50)
- (3) イエスの私的奉仕 (13 : 1～17 : 26)
 - ①最後の晩餐 (13 : 1～30)
 - ②階上の間の説教 (13 : 31～16 : 33)
 - ③大祭司の祈り (17 : 1～26)

2. 注目すべき点

- (1) 弟子たちへの教えは、勝利のことばで終わった。
 - ①「わたしはすでに世に勝ちました」(ヨハ 16 : 33)
 - ②十字架、復活、昇天が予見されている。
- (2) この段階で、イエスの働きは預言者から祭司に移行した。
- (3) ここでの祈りは、聖書の中の最高の祈りである。

3. アウトライン (大祭司の祈り)

- (1) イエス自身のための祈り (17 : 1～5)
- (2) 弟子たちのための祈り (17 : 6～19)
- (3) 将来の信者たちのための祈り (17 : 20～26)

今回は、(2) を取り上げる。

イエスは新約の共同体の核のために祈られた。

その祈りを 3 区分して学ぶと、教会誕生の確実性が見えてくる。

I. 父から子に与えられた少数の人たち (6～8 節)

1. 6 節

Joh 17:6 あなたが世から選び出して与えてくださった人たちに、わたしはあなたの御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに委ねてくださいました。そして彼らはあなたのみことばを守りました。

- (1) この小さな群れ (11 人の弟子集団) は、父から子に与えられたものである。

- ①彼らは、世から選び出された。
- ②ヨハ 17 章には、「世」ということばが 18 回も出てくる。

* 「世」とは、神に敵対する勢力、システムのことである。

③父は彼らの子に贈り物として与えた (ヨハ 6 : 37)。

(2) 子は彼らに、父の御名を現した。

①御名とは、父のご人格、属性、特徴などである。

②イエスは、自分を見た者は父を見たと言われた。

③イエスは父 (契約の神としての父) を完全に明らかにした (完結した行為)。

④御名は、契約関係の保証である。

(3) 彼らは、父のみことばを守った。

①イエスは、彼らをほめておられる。

②彼らは、イエスが語る父のことばに応答した (完了形。今も続いている)。

③彼らは完ぺきではなかったが、献身の姿勢は正しかった。

④過去の失敗や、これから起ころうとしている裏切りへの言及は、一切ない。

2. 7~8 節

Joh 17:7 あなたがわたしに下さったものはすべて、あなたから出ていることを、今彼らは知っています。

Joh 17:8 あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ、わたしがあなたのもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしを遣わされたことを信じました。

(1) 子は父を完ぺきに啓示した。

①子は父のことばを彼らに伝えた。

(2) 今彼らは知っている。

①父と子が一つであることを信じた。

②その状態が続いている (完了形)。

③「今」とは、長い訓練と教えを経た上で到達した十字架直前の段階を指す。

④弟子たちは、イエスの教えも働きもすべて父から出ていることを悟った。

⑤旧約の啓示は、新約の使徒的証言へと橋渡しされる。

⑥以上のことを前提に、イエスは弟子たちのために大祭司として祈られた。

II. 弟子たちの守りを願う祈り (9~16 節)

1. 9~10 節

Joh 17:9 わたしは彼らのためにお願いします。世のためにではなく、あなたがわたしに下さ

った人たちのためにお願いします。彼らはあなたのものですから。

Joh 17:10 わたしのもはすべてあなたのもの、あなたのものはわたしのものです。わたしは彼らによって栄光を受けました。

(1) これは、11 人のための祈りである。

①これは、世のための祈りではない。

*世は不信仰であり、その状態に保たれる必要はないのである。

②これは、教会形成のための特別な祈りである。

*この祈りは、後のすべての信者のための祈り (17 : 20) へと展開する。

(2) 子のもは父のもの、父のもは子のものである。

①弟子たちは、本質的に父に属する存在である。

②弟子たちは、父と子の一体性のゆえに、子のもでもある。

③子と父は、同じ権威を有する神である。

*人は神に向かって、「わたしのもはみなあなたのもの」と言える。

*しかし、「あなたのものはわたしのものです」とは言えない。

(3) 「わたしは彼らによって栄光を受けました」

①これは、不完全な弟子たちにとって大いなる励ましと慰めである。

②将来の宣教活動において、さらに顕著になる。

2. 11 節

Joh 17:11 わたしはもう世になくなります。彼らは世にいますが、わたしはあなたのもとに参ります。聖なる父よ、わたしに下さったあなたの御名によって、彼らをお守りください。わたしたちと同じように、彼らが一つになるためです。

(1) 状況が大きく変化しようとしているので、この祈りが必要となる。

①イエスは世を去り、父のみもとに行く。

②弟子たちは、世に残される。

③イエスに向けられていた「世からの憎しみ」は、弟子たちに向けられる。

④弟子たちを守る役割は、父に委ねられる。

(2) 御名の中に保つ。

①父は、聖なる父であり、罪に汚れた被造世界からは分離している。

②イエスを信じた弟子たちは、聖なる者とされている (世からの分離)。

③弟子たちは、新しい契約の共同体として、神の性質に基づく保護下に置かれる。

(3) その目的は、彼らが一つとなるためである。

①彼らの性質や目的がイエスに似たものとなる。

②父と子が一つであることが、そのモデルとなる。

③彼らの一致と守りは、新約の啓示と福音が正しく伝えられるための不可欠条件。

3. 12 節

Joh 17:12 彼らとともにいたとき、わたしはあなたが下さったあなたの御名によって、彼らを守りました。わたしが彼らを保ったので、彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためでした。

(1) イエスは、良き羊飼いとして彼らを守った。

①これは、イエスの地上生涯への言及である。

(2) 唯一の例外は、イスカリオテのユダである。

①彼は、滅びの子である。

②ユダは羊の一員ではなかった。最後に、それが明らかになった。

③彼はイエスを売り渡すことで、知らないうちにサタンの手先となった。

④ユダの裏切りは、詩 41 : 9 の成就である。

⑤彼は、自発的な選択によってその役割を担った。

4. 13～14 節

Joh 17:13 わたしは今、あなたのもとに参ります。世にあってこれらのことを話しているのは、わたしの喜びが彼らのうちに満ちあふれるためです。

Joh 17:14 わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではないからです。

(1) イエスが励ましのことばを語っている理由

①イエスが死んだ後、弟子たちはイエスのことばを思い出すようになる。

②それによって、イエスの喜びが満ち溢れるようになる。

③イエスの喜びとは、悪に打ち勝ち、永遠のいのちをもたらしということ。

(2) 父の守りが必要な理由

①イエスは父のことばを彼らに与え、彼らはイエスのようになった。

②イエスが憎まれたように、彼らも世から憎まれる。

③彼らは、新約共同体の核である。それゆえ、霊的戦いの標的となる。

5. 15～16 節

Joh 17:15 わたしが願うことは、あなたが彼らをこの世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。

Joh 17:16 わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。

(1) 神の計画は、彼らを世から取り去ることではない。

- ①むしろ、世にあって彼らを悪い者から守ることである。
- ②彼らには、この世にあって果たすべき使命が与えられていた。

(2) 悪い者（男性名詞と解釈）とは、サタンのことである。

- ①サタンは、この世の頭である。
- ②信者を破壊するためならなんでもする。
- ③しかし、サタンの意図が成就することはない。
- ④神は、ご自身の民を守られる。

(3) イエスがこの世に属していないように、弟子たちもこの世のものではない。

- ①コロ 1 : 13

Col 1:13 御父は、私たちが暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

- ②この世からの誘惑を受けたとき、この聖句を思い出すべきである。

III. 弟子たちの聖めを願う祈り (17～19 節)

1. 17 節

Joh 17:17 真理によって彼らを聖別してください。あなたのみことばは真理です。

(1) 聖めとは、この世からの分離である。

- ①この世の価値観、罪、目的からの分離である。
- ②神の働きのための分離である。

(2) 聖めの方法は、真理のみことばである。

- ①神のことばを学ぶなら、その人は聖め別たれる。
 - *心と知性が変化する。
 - *内面の変化は、生き方の変化をもたらす。
- ②この原則は、現代の信者にも適用される。

2. 18 節

Joh 17:18 あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。

(1) 父が子を世に遣わした。

- ①子の使命は、父を啓示することである。
- ②イエスは、すべての信者のモデルである。

(2) イエスは弟子たちを世に遣わした。

- ①父を知らしめることが、弟子たちの使命である。

3. 19 節

Joh 17:19 わたしは彼らのため、わたし自身を聖別します。彼ら自身も真理によって聖別されるためです。

(1) 「わたしは彼らのため、わたし自身を聖別します」

- ①イエスの性質は、聖めを必要としていない。
- ②このことばは、十字架の死への献身を意味している。
- ③イエスの死がなければ、宣教もない。

(2) 真理は弟子たちを聖め別つ。

- ①イエスの贖いの死を信じる者は、この世から聖め別たれる。

結論：今日の信者への適用

1. 自分の出所とアイデンティティを知る。

- (1) 自分が神によって生まれたという自己認識が、人生の方向性を定める。
- (2) 信者は、みことばを通して「神の性質と御心」を知る必要がある。

2. 世の中での守りを求める。

- (1) 世の中に置かれているのは、使命を果たすためである。
- (2) 信者は神の所有物であり、その守りの中にある。
- (3) 祈りの焦点を、自分に託された人に向ける。

3. 真理による聖別を受け入れる。

- (1) みことばの学びによって、この世からは区別される。
- (2) 信者は、世にあっても世から出た者ではない。
- (3) 聖別の目的は、宣教の使命を全うするためである。

4. 宣教のために遣わされている自覚を持つ。

- (1) 奉仕や宣教の背後には、キリストの犠牲による聖別が土台にある。
- (2) 「派遣されている者」である自覚が、日常生活の方向性を変える。